

授業評価アンケート結果報告書

関西大学大学院会計研究科

(会計専門職大学院)

平成18年度春学期



関西大学大学院会計研究科

教務・FD委員会

平成19年3月20日

目 次

I	授業評価アンケート結果概要	
1.	授業評価目的	1
2.	実施方法	1
3.	全体像	2
4.	基本科目群（科目別）	5
5.	基本科目群・発展科目群（系別）	13
II	FD活動	
1.	Guiral 先生によるFD講習	19
2.	Mawani 先生によるFD講習	20
3.	海外研修	22
4.	CEAS を利用した取り組み	24
III	今後の課題	25
IV	授業評価アンケートフォーム	29

I . 授業評価アンケート(春学期分)結果概要

1. 授業評価アンケートの目的

「学の実化」を標榜する本学において、本研究科は専門職大学院として「学理と実際との調和」を実践し、現実の社会に充分に対応できる公認会計士になるために必要な教育を行っている。本研究科では、近年の会計改革の流れである会計教育水準の国際的統一化、およびそれに呼応するわが国公認会計士制度改革という背景の中で、「テクニシャンよりもプロフェッションを」という社会的要請を受けて、職業的倫理観と高度な判断能力を備えた人材の養成を目的としている。そしてそのための教員の資質向上と教育水準の維持向上の施策のひとつとして、「教務・FD委員会」「専攻分野別FD委員会」を組織し運営している。

本報告書は、関西大学大学院会計研究科における平成18年度のFD活動をまとめたものである。本報告書は三部構成となっている。第1部では、平成18年度春学期開講の講義について実施した授業評価アンケートをまとめている。第2部では、本研究科で行ったさまざまなFD活動の概要を紹介している。第3部では、第1部第2部の内容を踏まえ、今後の課題と展望を示している。

第1部の「授業評価アンケート（春学期分）結果概要」では、平成18年度春学期に開講された授業評価アンケートをまとめている。実施方法、授業評価アンケートの結果、実施科目の一覧、授業評価アンケートの質問状を報告する。授業評価アンケートの結果は、結果の全体像、必修科目（1年次配当科目）の科目ごとの結果、科目系ごとにまとめた結果である。

授業評価アンケートは、本研究科が専門職大学院としての教育水準を継続的に向上させることを目的として、それを実施し、その結果を分析し、教育にフィードバックするためのものであり、FD活動のひとつである。また、第三者評価制度の導入（「学校教育の一部を改正する法律」（2002年）による）により、専門職大学院としての研究教育活動についての評価を、評価機関から定期的に受けることが求められている。これは、大学教育の質に関する新たな保証システムとして導入された制度であり、本研究科もこの評価を受け、十分な教育水準を維持していることを保証していく予定である。

2. 実施方法

（1）対象科目

本研究科は平成18年度に開講し、現在学生は1年次生のみから構成されている。よって、授業評価アンケートの実施科目は、原則として、平成18年度春学期に開催されたすべての1年次配当科目である。それは、必須科目である基本科目群8科目（春学期前半開講科目は、財務会計論、上級簿記、企業法入門の3科目、春学期後半開講科目は、上級原価計算論、監査制度論、上級管理会計論の3科目、春学期開講科目は、監査基準、実践経営管理論の2科目）、選択必須科目である発展科目群5科目（商法、インベストメント論、中小企業金融論、コーポレートガバナンス論、ミクロ経済学）である。

（2）実施方法

本研究科では、授業評価アンケートを各講義の終了時に実施している。

個別演習科目であるアカデミック・ソリューション、プロフェッショナル・ソリューション、論文指導・修士論文を除き、すべての科目が15回の講義が実施される。最終講義日の前回である第14回め（個別演習科目では29回め）の講義で、授業評価アンケートの質問状と回答用紙が授業担当者に

よって配布され、最終講義日の講義終了時に授業評価アンケートの回答用紙が授業担当者によって回収される。回収された回答用紙は、授業担当者によって事務に戻却され、そこで集計される。授業評価アンケートは講義時間に影響を与えぬよう、また受講生の正直な回答を促すため、講義時間外に無記名で記入される。集計された結果は、今後の授業内容および方法の改善のための資料として、各授業担当者に配布される。

本年度の授業評価アンケートで使用された質問状は、後ページに掲載している。

(3) 回答率

授業評価アンケート実施対象科目の履修者数は延べ 692 名であり、回答数は延べ 477 件であった。よって、授業評価アンケートの回答率は 68.93%である。

3. 全体像

授業評価アンケートの結果と分析について、ここでは全体的な内容を示す。基本科目群での科目ごとや科目系ごとの結果と分析については、後に掲載している。

授業評価アンケートの各項目の基本科目群講義別平均の最高点、最低点および講義全体の加重平均点は以下の通りである。

	加重平均点	最高点	最低点
質問 1	4.22	4.51	3.78
質問 2	3.46	4.86	2.78
質問 3	4.16	4.56	3.44
質問 4	4.08	4.67	3.61
質問 5	3.91	4.67	3.08
質問 6	3.92	4.42	3.40
質問 7	3.82	4.29	2.96
質問 8	3.99	4.30	3.68
質問 9	3.89	4.39	3.10
質問 1 0	3.68	3.89	3.18
質問 1 1	3.94	4.56	3.32
質問 1 2	4.85	4.94	4.71
質問 1 3	2.22	2.44	1.53
質問 1 4	3.17	4.05	1.72
質問 1 5	3.94	4.38	3.39
質問 1 6	3.85	4.12	3.44
質問 1 7	3.71	4.27	2.94
質問 1 8	1.97	3.13	1.04
質問 1 9	2.74	4.03	1.19
質問 2 0	2.27	2.75	1.36

(1) 受講生の傾向

開講科目全般にわたって次の三点が共通傾向としてあげられる。1) 受講生は概ね熱心にあり、出席率が高い。2) 受講生の知識レベルに差がある。3) 受講生の予習時間が少ない。

まず、受講生が概ね熱心であり、出席率が高いことについて。平成 18 年度は 1 年次生のみから構

成され、また春学期は必須科目である基本科目群の講義がほとんどであることから、出席率が高いことは自然な現象であるともいえる。とはいえ、ほとんど私語がなく、熱心にメモをしている学生が多いや講義終了後に質問が多いことから、受講生は概ね熱心であり、出席率の高さはそのためであるといえる。

次に、受講生の知識レベルに差があることについて。本研究科の一般入学試験は、学力重視の入学試験と素養重視の入学試験の二種類があり、平成18年度入学試験が3月まで実施されたこともあり、入学前に十分な準備を終えられなかった学生がいることは否めない。また出身学部も様々であり、そのため、受講生の知識レベルに差が生じていると考えられる。入学前に十分な準備を終えられなかった学生を想定し、上級簿記と上級原価計算論については、春学期前半開講クラスと春学期後半開講クラスに分け、入学前に十分な準備を終えられなかった学生には春学期後半開講クラスの受講を促して実施している。しかしながら、学習時間等の差が原因なのかもしれないが、受講生の知識レベルに差が生じているようである。

第三に、受講生の予習時間が少ないことについて。受講への熱心な態度に反して、予習時間が少ないようである。復習時間も決して多くはないようであり、熱心に受講することで満足しているのかもしれないと思われる。理由や学習方法などについて学生への話を聞くなどして、今後の対応をはかる必要がある。

最後に、その他の事項について。問題演習をどれほど行っているかは、講義科目、学生によって様々なようである。また、各講義が扱う領域の背景や基本的な考え方の理解よりも、近視眼的に解答能力や解答可能性を求める学生が散見されたようである。

(2) 講義で工夫したこと・留意したこと

本研究科では、学生の学習支援目的で、基本科目群については全講義の全回数について録画し、DVDで学生への貸し出しを行っている。また、その他科目については支障のない範囲で録画し、学内でのストリーミング配信を行っている。この内容については「Ⅱ. FD 活動」に掲載している。

開講科目全般にわたって次の二点が共通傾向としてあげられる。1) 配布レジユメの作成。2) 課題を含めた問題作成と演習。

まず、配布レジユメの作成について。多くの講義で、パワーポイントが利用されている。スライドの作成とともに、そのスライド資料の配付レジユメに工夫がなされ、受講生に理解しやすく復習の教材となるように心がけられている。また、パワーポイントを使用しない講義においても、配布レジユメの作成にあたって、講義の内容を反映しつつ受講生の理解促進に努められている。

次に、課題を含めた問題作成と復習について。ほとんどの講義で、課題、小テスト、復習用等の問題が作成され、詳細な解説や個別に指導するなどの方策がとられている。これらは、基礎力の養成と講義内容の復習と定着を目的としたものである。

最後に、その他事項として、講義内容について科目特性に応じた工夫がなされている。抽象的な内容に終始せず、具体例や実務体験などが適宜折り込まれている。

基本科目群(科目別)アンケート結果

科目： 上級簿記

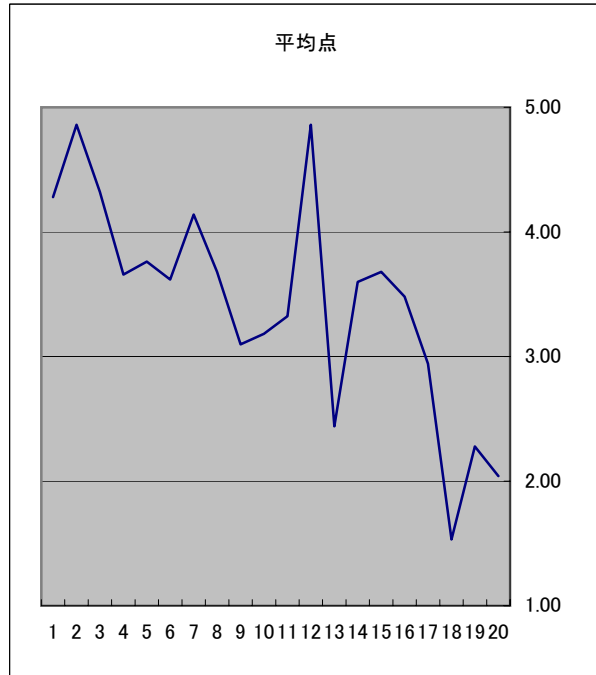
配当年次：1年次

受講者数：70

開講時限：春学期前期 火2～3 春学期後期 水2～3

回答者数：50

質問No.	平均点	最頻値	最高点	最低点
1	4.28	4	5	1
2	4.86	5	5	4
3	4.32	5	5	1
4	3.66	4	5	1
5	3.76	5	5	1
6	3.62	4	5	1
7	4.14	5	5	1
8	3.68	4	5	1
9	3.10	3	5	1
10	3.18	3	5	1
11	3.32	4	5	1
12	4.86	5	5	4
13	2.44	1	5	1
14	3.60	5	5	1
15	3.68	5	5	1
16	3.48	4	5	1
17	2.94	3	5	1
18	1.53	1	4	1
19	2.28	1・2・3	4	1
20	2.04	2	5	1



受講生の傾向

講義時間開始時には、ほぼ全員が着席している状態で非常に熱心だった。

教員の説明に真面目に耳を傾けたり、講義内容を熱心にメモしている学生が多く、私語はほとんどない状態だった。

問題演習の時間には、退屈気味にする学生も見られたが、ほぼ全員が真剣に取り組んでいた。ただし、試験の結果を見てみると、講義時間外で問題演習を繰り返し行っている形跡が見られず、知識の定着度は全体的に高くはなかった。

また、配布したパワーポイントや問題の解答解説をよく読んでいない学生が多く、解法のテクニックだけを覚えようとする傾向があった。

講義で工夫したこと・留意したこと

会計基準や実務指針の原文にできるだけ忠実な解説を心がけ、学生に原文を見るように促した。

パワーポイントを利用した講義展開を中心に実施した。

オリジナルの問題を作成し、丁寧な解答解説を付して、学生の理解を促した。

暗記よりも理解させることに力点をおき、高レベルの問題に対処できるような基礎力の養成を心がけた。

今後の対応

講義の範囲が広く、問題演習に十分な時間が取れないので、講義の時間配分を考える。

学生一人ひとりの理解度に差があるので、それに応じた効果的な問題作成を心がける。

科目： 財務会計論

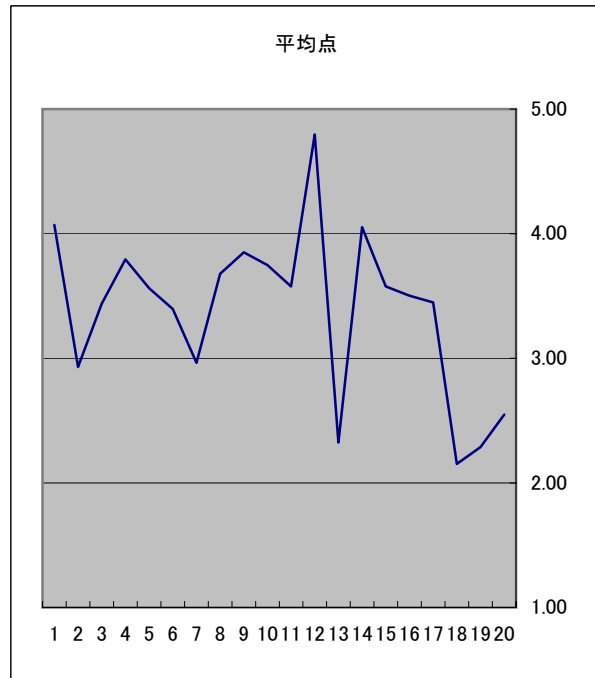
配当年次：1年次

受講者数：70

開講時限：春学期前期 月2・木3 月3・木2

回答者数：59

質問No.	平均点	最頻値	最高点	最低点
1	4.07	4	5	2
2	2.93	3	5	1
3	3.44	4	5	1
4	3.79	4	5	1
5	3.56	4	5	1
6	3.40	4	5	1
7	2.96	3	5	1
8	3.68	4	5	2
9	3.85	4	5	1
10	3.75	4	5	1
11	3.58	4	5	1
12	4.80	5	5	1
13	2.32	2	5	1
14	4.05	5	5	2
15	3.58	4	5	1
16	3.50	4	5	1
17	3.45	4	5	1
18	2.15	3	5	1
19	2.29	1	5	1
20	2.55	2	5	1



受講生の傾向

講義開始時には、ほぼ全員が着席しており、非常に熱心であった。

課題は、ほぼ全員が期限内に提出している。内容には差があるが、回数を重ねるにしたがって、全体として良くなる。

講義内容のメモを取る学生が多く、その後の提出物にメモ内容を反映させている。

講義で工夫したこと・留意したこと

講義開始時に配付するレジュメは、シラバスに即した概要に留め、講義を通じて会計情報の背後にある会計思考を理解させるように努めた。

提出された課題は、学生の個別の質問に応じて、当該学生に学生本人の提出物を提示のうえ、問題箇所を指摘し、改善に向けたアドバイスを与えた。

今後の対応

学生の予習・復習が効果的になるように、レジュメ配付のタイミングを見直す。

授業の進度を少し速めて緊張感を与える。

変更極まりない会計基準・制度ではあっても、現代社会のもとで依然として有効に機能している従来の基礎的部分については言及し、その重要性を認識させるように努める。

科目： 上級原価計算論

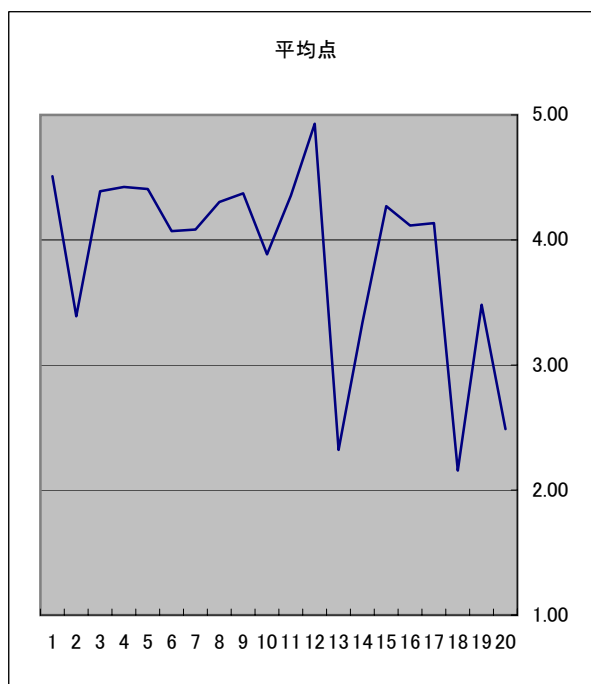
配当年次：1年次

受講者数：70

開講時限：春学期前期 水2～3 春学期後期 月2～3

回答者数：59

質問No.	平均点	最頻値	最高点	最低点
1	4.51	5	5	3
2	3.39	3	5	3
3	4.39	5	5	3
4	4.42	5	5	2
5	4.41	5	5	2
6	4.07	4	5	2
7	4.08	4	5	1
8	4.30	4	5	2
9	4.37	5	5	2
10	3.89	3	5	2
11	4.36	5	5	2
12	4.93	5	5	4
13	2.32	1	5	1
14	3.34	3	5	1
15	4.27	5	5	2
16	4.12	4	5	2
17	4.13	4	5	2
18	2.16	1	5	1
19	3.48	4	5	1
20	2.49	2	5	1



受講生の傾向

受講生の傾向として、基礎学力の差が大きく見受けられる。

授業中においては、熱心に授業を聴講し、練習問題などの取り組んでいる姿が見受けられる。

授業の満足度にかかわるスコアは総じて高いが、予習や答案練習会との連動のスコアは総じて低い。

データの傾向は上級管理会計論と同様である。

講義で工夫したこと・留意したこと

パワーポイントを作成して講義内容のポイントを提示した。

学習の進捗程度にあわせて練習問題を作成し、毎回の講義において解答解説を行った。

基礎学力の差が大きいことから、基礎問題と応用問題の双方について解説を行った。

本講義と関係の深い上級管理会計論において、基本的な原価計算の概念や解法について適時解説し、本講義との連携に留意した。

今後の対応

予習の時間が短いことから、事前課題などにより対応することが必要であるとする。

答案練習会との連動が必要であるため、その一部を授業で取り込む必要があるとする。

科目： 上級管理会計論

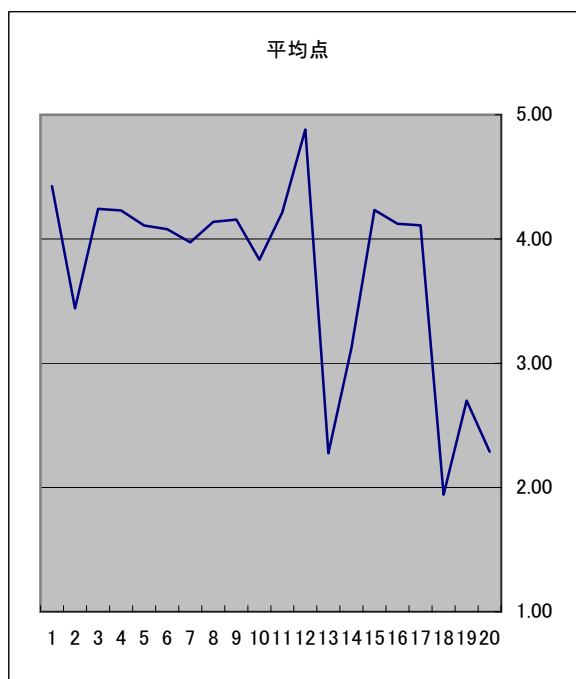
配当年次：1年次

受講者数：70

開講時限：春学期後期 火3・木2 火2・木3

回答者数：66

質問No.	平均点	最頻値	最高点	最低点
1	4.42	5	5	2
2	3.44	3	5	2
3	4.24	4	5	2
4	4.23	5	5	1
5	4.11	4	5	1
6	4.08	4	5	1
7	3.97	4	5	1
8	4.14	4	5	1
9	4.16	4	5	2
10	3.83	4	5	2
11	4.21	5	5	2
12	4.88	5	5	1
13	2.28	1	5	1
14	3.12	3	5	1
15	4.23	5	5	2
16	4.12	4	5	2
17	4.11	4	5	2
18	1.94	1	5	1
19	2.70	3・4	5	1
20	2.29	2	5	1



受講生の傾向

受講生の傾向として、基礎学力の差が大きく見受けられる。

授業中においては、熱心に授業を聴講し、練習問題などの取り組んでいる姿が見受けられる。

授業の満足度にかかわるスコアは総じて高いが、予習や答案練習会との連動のスコアは総じて低い。

データの傾向は上級原価計算論と同様である。

講義で工夫したこと・留意したこと

パワーポイントを作成して講義内容のポイントを提示した。

学習の進捗程度にあわせて練習問題を作成し、毎回の講義において解答解説を行った。

基礎学力の差が大きいことから、基礎問題と応用問題の双方について解説を行った。

本講義と関係の深い上級原価計算論において、近年の管理会計の動向についても適時解説し、本講義との連携に留意した。

今後の対応

予習の時間が短いことから、事前課題などにより対応することが必要であるとする。

答案練習会との連動が必要であるため、その一部を授業で取り込む必要があるとする。

科目： 監査制度論

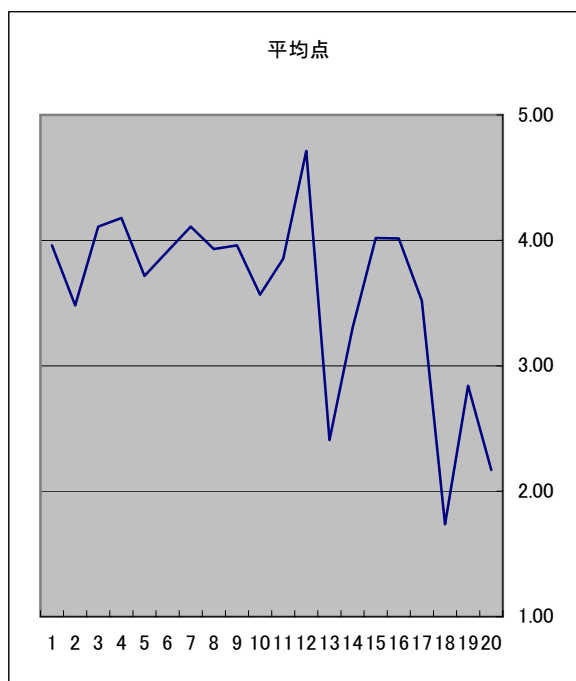
配当年次：1年次

受講者数：70

開講時限：春学期後期 火2・金3 火3・金2

回答者数：56

質問No.	平均点	最頻値	最高点	最低点
1	3.96	4	5	2
2	3.48	3	5	1
3	4.11	4	5	1
4	4.18	4	5	2
5	3.72	4	5	1
6	3.91	4	5	2
7	4.11	4	5	3
8	3.93	4	5	3
9	3.96	4	5	1
10	3.57	3	5	2
11	3.85	4	5	1
12	4.71	5	5	1
13	2.41	2	5	1
14	3.30	3	5	1
15	4.02	4	5	1
16	4.01	4	5	1
17	3.52	4	5	1
18	1.74	1	5	1
19	2.84	3	5	1
20	2.17	2	5	1



受講生の傾向

基本科目(必修科目)群に属する科目という関係上、受講生の出席率は非常に高く92%~98%となっている。

上記アンケート結果より、授業に対する予習時間が1時間(項目13)とかなり短く、復習時間も1時間強(項目14)となっており、望ましい状況とは言えない。

Class AとClass Bとの間での理解度の差が、小テストならびに期末試験から判断すると大きい(ただし、Class AとClass Bを区別していないアンケート集計結果からは不明)。

講義で工夫したこと・留意したこと

毎回、パワーポイントによるスライドを用意・配布した上で、監査制度に関する重要論点を確実に講義の中で押さえるようにした。

スライドの最後には、受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するために必要となる参考文献を列挙した。

授業が2回終了する毎(1週間)に、前2回分の理解度を確認するために小テストを授業時間の最初10~15分程度で実施し、この小テストを添削して返却した。最終的に、各クラスで6回分の小テスト→添削→返却を繰り返すことで、各自にエッセイの書き方(重要論点の抽出と一貫した論旨の展開)を習得できるようにした。

今後の対応

こちらの期待に反して、受講生の側での予習・復習の時間が相対的に少ないため、復習課題の一部提出強制をする必要があるかもしれない。

授業時間中の受講生側の理解度を確認するために、適時に指名して答えさせる必要がある。このことは、授業時間中の緊張感を保つことにも資すると考えられる。

答案練習会との連動を図る必要がある。

科目： 監査基準

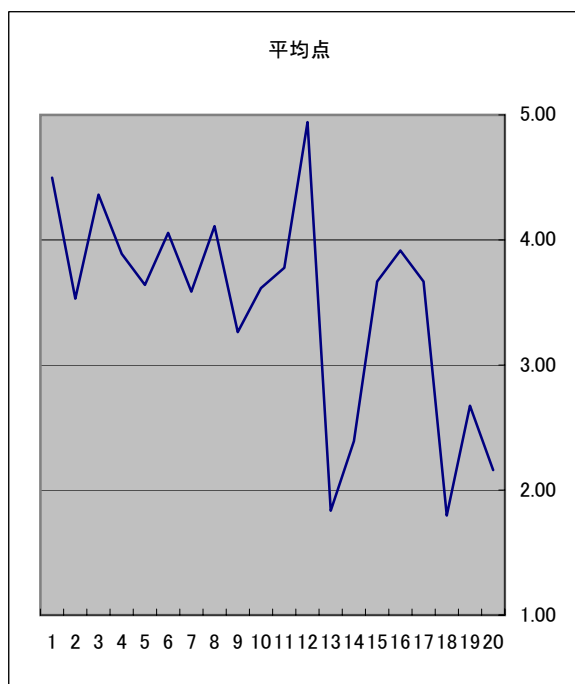
配当年次：1年次

受講者数：70

開講時限：春学期 金2 金3

回答者数：36

質問No.	平均点	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4・5	5	4
2	3.53	3	5	3
3	4.36	4	5	3
4	3.89	4	5	2
5	3.64	4	5	2
6	4.06	4	5	2
7	3.59	3	5	2
8	4.11	5	5	2
9	3.26	3	5	1
10	3.62	4	5	2
11	3.78	4	5	1
12	4.94	5	5	2
13	1.83	1	5	1
14	2.39	3	5	1
15	3.67	4	5	1
16	3.92	4	5	2
17	3.67	4	5	2
18	1.80	1	5	1
19	2.67	1・3	5	2
20	2.16	2	4	1



受講生の傾向

授業の初回から最終回までを通して欠席者は少なく、また、ほとんどの学生が熱心に受講していた。

授業終了時に質問がほぼ毎回数名からあった。

学習の方法や参考図書の推薦など、様々な相談事項が寄せられた。

当該科目について学習経験のある学生とない学生で、理解度にかかなりの差異があった。

講義で工夫したこと・留意したこと

授業の初回から最終回までの授業の体系を最初に説明した。

毎回レジュメを配布し、当該授業の最初にレジュメや資料の説明およびポイントとなる重要事項の説明を行い、さらに、終了時に再度ポイントの確認を行った。

実務体験をときどき説明に加えるようにした。

今後の対応

講義形式で単調になりやすいため、メリハリをつけるよう工夫する。

講義形式ではあるがときどきディスカッションも加えるようにする。

学生が予習しやすいよう、当該授業の終了時に次回の授業内容を簡単に予告する。

レジュメをもう少し簡素化する。

科目： 企業法入門

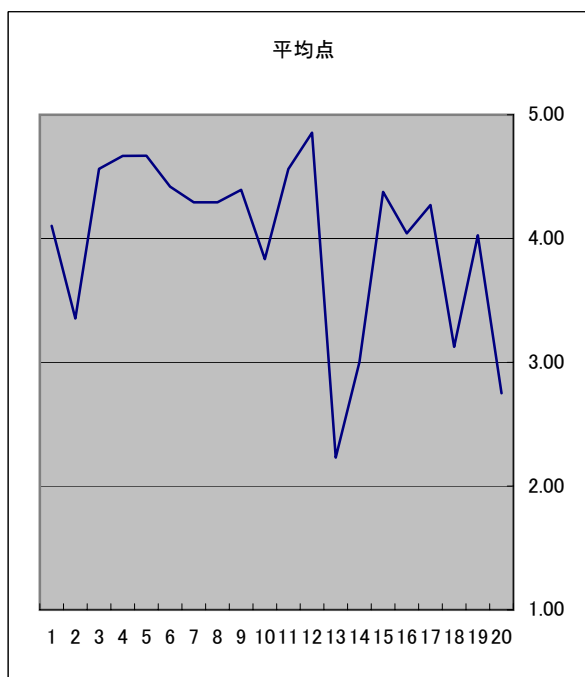
配当年次：1年次

受講者数：70

開講時限：春学期前期 月3・木2 月2・木3

回答者数：48

質問No.	平均点	最頻値	最高点	最低点
1	4.10	5	5	2
2	3.35	3	5	2
3	4.56	5	5	4
4	4.67	5	5	3
5	4.67	5	5	4
6	4.42	5	5	2
7	4.29	4	5	1
8	4.29	4	5	3
9	4.39	5	5	3
10	3.83	4	5	2
11	4.56	5	5	3
12	4.85	5	5	2
13	2.23	2	5	2
14	3.00	3	5	1
15	4.38	5	5	1
16	4.04	4	5	1
17	4.27	4	5	2
18	3.13	5	5	1
19	4.03	4・5	5	1
20	2.75	2	5	1



受講生の傾向

ほとんどの学生がまじめに授業に参加していた。

学生によっては、積極的にメモを取り、授業終了後に質問をするなど熱心であった。

企業法入門については最初の段階で学生のレベルに差があった。

予習・復習にあまり時間をかけていないようであった。

講義で工夫したこと・留意したこと

授業内容をコンパクトにまとめたレジュメを配布し、学生の予習・復習の便宜を図った。

定期的に小テストをおこなうことで、学生に対して理解の確認作業をさせるとともに、学生の理解度を把握した。

授業時に学生の理解度を見ながら、その都度、授業レベルについて配慮をした。

授業中は、抽象的な内容で終わらずに具体的な例を示すことで、より身近でわかりやすいものにするのに心がけた。

今後の対応

学生のレベルに差があるので、それぞれの学生に応じた授業ができるように配慮したい。

学生に予習・復習を促すとともに、具体的な予習・復習の内容を伝えることで学生の予習・復習に対する便宜を図りたい。

より効率のよい授業ができるように、レジュメの作成およびホワイトボードの利用について改善を図りたい。

科目： 実践経営管理論

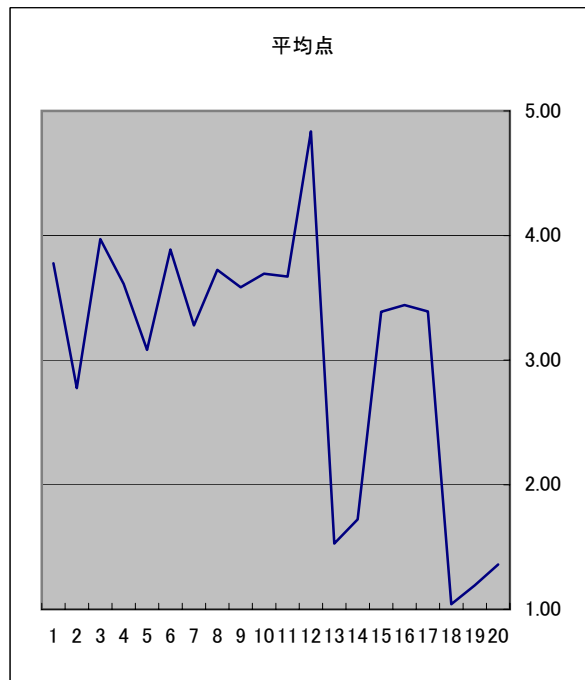
配当年次：1年次

受講者数：70

開講時限：春学期 土2 土3

回答者数：36

質問No.	平均点	最頻値	最高点	最低点
1	3.78	4	5	2
2	2.78	3	4	2
3	3.97	4	5	3
4	3.61	4	5	2
5	3.08	3	5	1
6	3.89	4	5	2
7	3.28	3	5	1
8	3.72	3	5	3
9	3.58	4	5	2
10	3.69	4	5	2
11	3.67	4	5	2
12	4.84	5	5	3
13	1.53	1	3	1
14	1.72	1	4	1
15	3.39	4	5	1
16	3.44	4	5	1
17	3.39	4	5	1
18	1.04	1	2	1
19	1.19	1	2	1
20	1.36	1	2	1



受講生の傾向

受講態度は全般にまじめで、熱心な取り組みを見せる学生が多かった。
出席率、課題提出ともに良好な水準にあった。
経営学、企業経営に対する知識の蓄積や理解度の差が大きい。

講義で工夫したこと・留意したこと

広範囲な領域を短時間でカバーしなくてはならず、各テーマにつきかなり要点を絞る必要があった。
授業の効率を高めるため、授業は既存の教科書・参考書を使うのではなく、配布資料にて進めた。
知識の獲得だけではなく、自ら考えることも大事なので、各種経営課題の背景要因についての理解を促した。

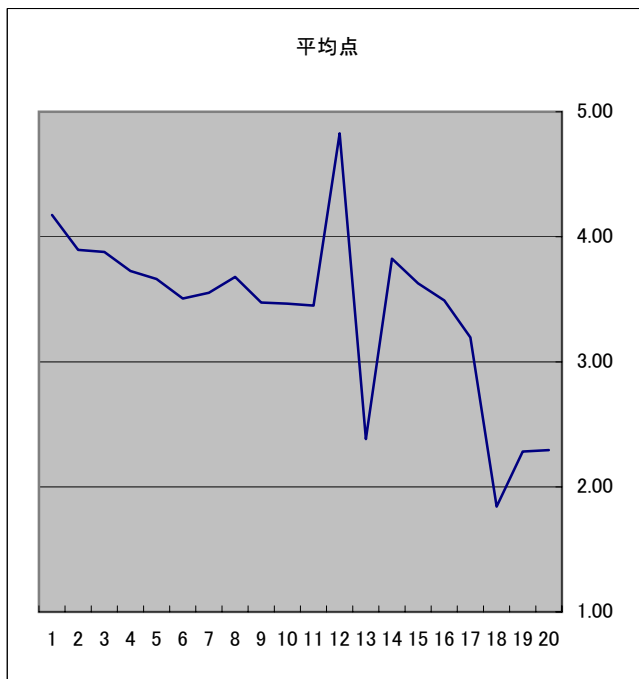
今後の対応

知識レベルに差がある受講者を対象とした資料作成を心がける。
より能動的な授業にするために、Q&Aの時間をもう少し増やす。
講義内容の定着を図るための課題提出を実践する。

基本科目群・発展科目群(系別)アンケート結果

系： 財務会計系
 受講者数:140 回答者数:109

質問No.	平均点
1	4.17
2	3.90
3	3.88
4	3.73
5	3.66
6	3.51
7	3.55
8	3.68
9	3.47
10	3.46
11	3.45
12	4.83
13	2.38
14	3.83
15	3.63
16	3.49
17	3.20
18	1.84
19	2.28
20	2.29



受講生の傾向

財務会計系の2科目とも授業への出席率が高い。また予習には時間をかけない一方で復習に時間をかける傾向にある。答案練習会の利用と評価は低い。

授業の評価に関しては科目ごとにばらつきがある。上級簿記については、講義要綱等にしがった講義であることや、教員による準備、教材提示等の効果的利用を高く評価する一方で、授業進捗が速いと、また授業の理解度が今ひとつ高まらないと感じられている。

財務会計論については、講義要綱等にしがった講義であることを高く評価する一方で、企業の進捗が遅いという点や教材提示等の利用に関して低く評価されている。その他には平均的評価が下されている。

講義で工夫したこと・留意したこと

科目担任者が自ら記す内容を、上の「受講生の動向」と重ねて評価する必要がある。

上級簿記については、教材提示等の効果的利用への工夫はそのまま学生の評価につながっているが、授業の理解度を高めるための工夫(会計基準等の原文を読ませる、教員オリジナルの問題を解かせる、暗記に偏らないように工夫する)にも関わらず、学生の理解度が高くなかったという点に注意する必要がある。

財務会計論については、会計思考を養うように心がけることや、学生の個別の質問に対してアドバイスするという対応に心がけることの工夫に対して、回答項目からその効果を確認できるに至っていない。あえて関連性を指摘すれば、これら工夫が、一方で授業の進行が遅いと感じさせ、他方で、理解度は悪くないという判断につながっている。

今後の対応

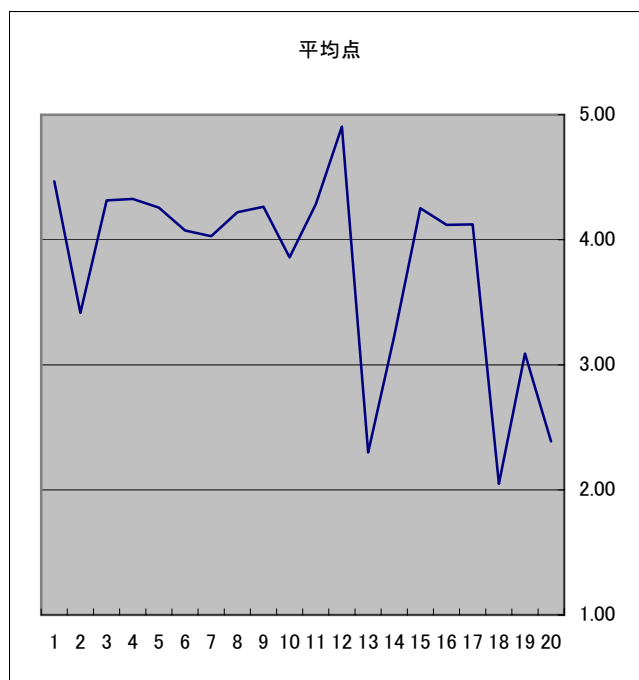
科目担当者が自ら記す「今後の対応」を上記2項目と照らしてまとめることとする。

上級簿記は、講義の時間配分と理解度を反映した問題作成に心がけるとの担当者の対応が記されているが、そのような対応が理解度の向上にどうつながるかを確認する工夫も採用していく必要がある。

財務会計論については、レジュメ配布のタイミングを再考して予習と復習を促進し、授業の進捗を速めて緊張感を出すという担当者の対応が記されているが、この科目についてもこれらの対応が効果的であることを随時確認できる工夫も考える必要がある。

系： 管理会計系(上級原価計算論、上級管理会計論)
受講者数:140 回答者数:125

質問No.	平均点
1	4.47
2	3.42
3	4.32
4	4.33
5	4.26
6	4.07
7	4.03
8	4.22
9	4.26
10	3.86
11	4.28
12	4.91
13	2.30
14	3.23
15	4.25
16	4.12
17	4.12
18	2.05
19	3.09
20	2.39



受講生の傾向

受講生の傾向として、基礎学力の差が大きく見受けられる。

授業中においては、熱心に授業を聴講し、練習問題などの取り組んでいる姿が見受けられる。

授業の満足度にかかわるスコアは総じて高いが、予習や答案練習会との連動のスコアは総じて低い。

講義で工夫したこと・留意したこと

パワーポイントを作成して講義内容のポイントを提示した。

学習の進捗程度にあわせて練習問題を作成し、毎回の講義において解答解説を行った。

基礎学力の差が大きいことから、基礎問題と応用問題の双方について解説を行った。

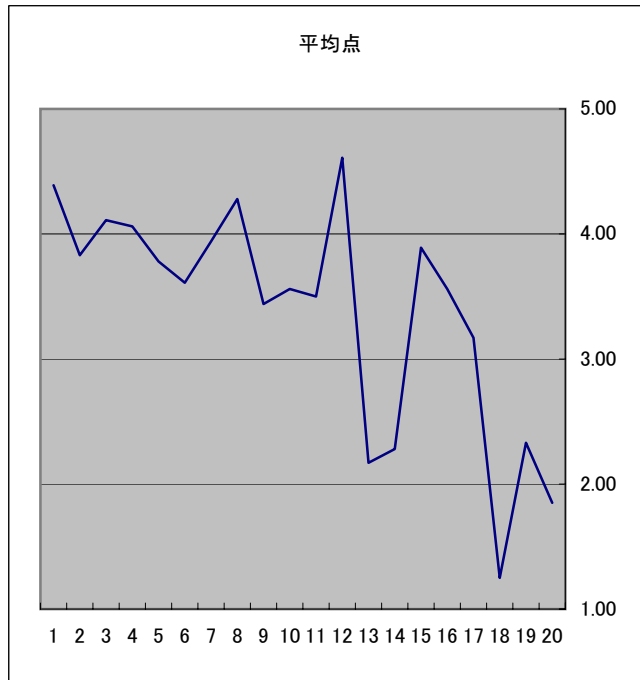
今後の対応

予習の時間が短いことから、事前課題などにより対応することが必要であるとする。

答案練習会との連動が必要であるため、その一部を授業で取り込む必要があるとする。

系： 税務会計系(上級税務会計論)
 配当年次:1年次
 受講者数:35 回答者数:18

質問No.	平均点
1	4.39
2	3.83
3	4.11
4	4.06
5	3.78
6	3.61
7	3.94
8	4.28
9	3.44
10	3.56
11	3.50
12	4.61
13	2.17
14	2.28
15	3.89
16	3.56
17	3.17
18	1.25
19	2.33
20	1.85



受講生の傾向

簿記3級をまだ終了していない学生から今までに学習経験のある学生まで当該科目に関するレベルに相当の差異があった。
 終了回頃には出席する学生が減少傾向にあった。
 毎回授業の終了時に質問があった。
 学習方法や参考図書について相談が多数寄せられた。

講義で工夫したこと・留意したこと

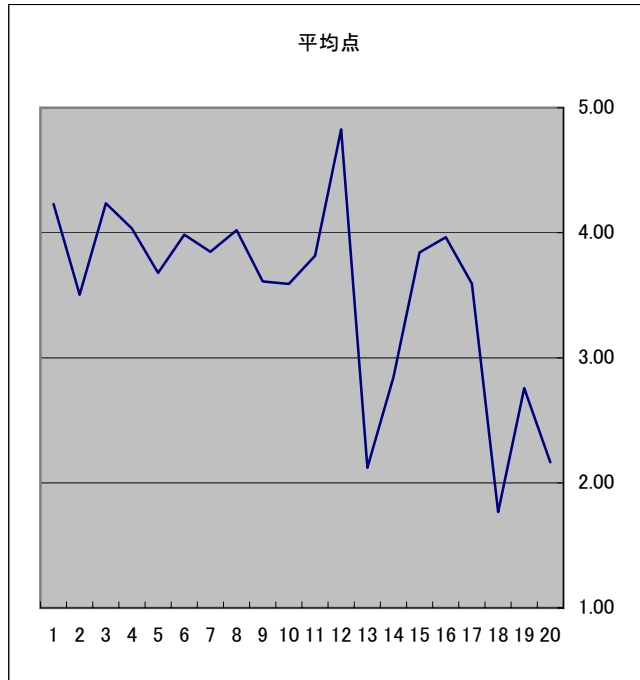
初心者の中には理解度がかなり低い学生もいたため、数回に一度、授業の冒頭に復習の機会を設けた。
 授業の最初と最後に当日のポイントを説明、確認した。
 設例をできるだけ取り入れるようにした。
 実務体験をときどき説明に加えるようにした。

今後の対応

授業の説明で、基本的な部分に、より時間配分を多くする。
 項目を限定し、説明を詳細に行う。
 講義形式ではあるが、質問やディスカッションなど学生の参加も促すようにする。

系： 監査系(監査制度論、監査基準)
 受講者数:140 回答者数:92

質問No.	平均点
1	4.23
2	3.51
3	4.24
4	4.03
5	3.68
6	3.98
7	3.85
8	4.02
9	3.61
10	3.59
11	3.82
12	4.83
13	2.12
14	2.85
15	3.84
16	3.97
17	3.59
18	1.77
19	2.76
20	2.16



受講生の傾向

受講生の出席状況が70～90%と比較的高くなっている(項目12)のは、春学期に開講する2つの科目が基本科目(必修科目)に属しているからである。

この出席比率に対して注意すべき点は、予習時間(項目13)と復習時間(項目14)が相対的に低いことである。

その他の受講生に係わる項目(項目15[授業による触発])(項目16[知識・能力の向上])(項目17[理解度の自己評価])は何れも肯定的である。

ただし、監査論という科目の性格上、会計学既習者と未習者との間の理解度に差が生じている。

講義で工夫したこと・留意したこと

春学期に開講された2つの基本科目(必修科目)については、何れも授業に際して利用するための講義資料を用意・配布しており、これは2006年度版「出講の手引き」に添った講義方式である。

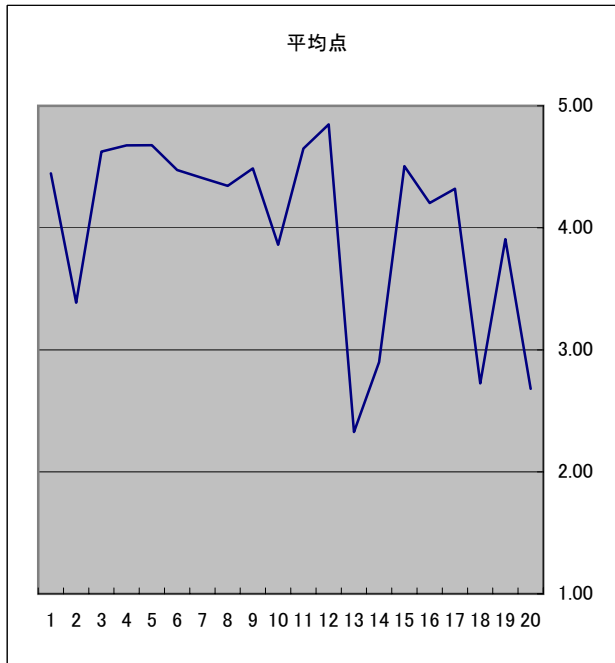
それぞれの科目の特徴は、「監査基準」が実務体験を適宜加えながら授業の進行を図ったのに対して、「監査制度論」では授業の理解度を向上させるために毎回の小テストを実施したことにある。

今後の対応

基本科目(必修科目)群に求められる要件は、公認会計士試験の短答式レベルを最低限クリアできるということにあり、「監査基準」では一般基準・実施基準・報告基準に添った講義によりわが国監査の内容や特徴を、また「監査制度論」ではわが国の法定監査制度の意義や特徴を教授することによって、学生が公認会計士試験レベルに到達した上で、より高位の発展科目群や応用科目群に進みやすい環境作りを目的としている。従って、公認会計士試験レベルすらクリアできないような授業内容とならないように、必修科目間での講義内容の調整をヨリいっそう図る必要がある。言うまでもなく、必修科目に求められるこのような要件は、監査系列に限定されるものではない。

系： 法律系(企業法入門、商法)
 受講者数:108 回答者数:67

質問No.	平均点
1	4.45
2	3.39
3	4.62
4	4.68
5	4.68
6	4.47
7	4.41
8	4.34
9	4.49
10	3.86
11	4.65
12	4.85
13	2.33
14	2.90
15	4.51
16	4.20
17	4.32
18	2.72
19	3.91
20	2.68



受講生の傾向

ほとんどの学生がまじめに授業に参加していた。
 学生によっては、積極的にメモを取り、授業終了後に質問をするなど熱心であった。
 法律系科目については法学部出身の学生から全くの法学初心者の学生までレベルに差があった。
 予習・復習にあまり時間をかけていないようであった。
 法律科目ということではじめから、苦手意識を持っている学生もいた。

講義で工夫したこと・留意したこと

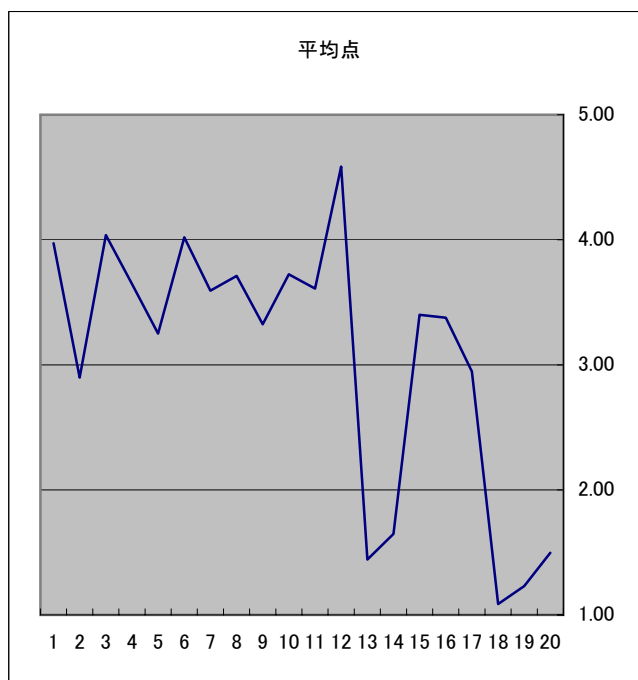
レジュメに基づいた授業をして学生の予習・復習の便宜を図り、その後に小テストをおこなうことで、理解の確認作業をさせた。
 法学は説得力の学問であるから、なぜそのような法制度になっているのかを中心に授業をおこなった。
 授業時に学生の理解度を見ながら、その都度、授業レベルについて配慮をした。
 授業中は、抽象的な内容で終わらずに具体的な例を示すことで、より身近でわかりやすいものにすることに心がけた。
 法律系科目は、難解な法律用語が多く出てくるが、ひとつひとつを丁寧に解説することを心がけた。

今後の対応

法学初学者の学生から法学部出身者まで、満足できるような授業をおこなうことができるように心がけたい。
 学生に予習・復習を促すとともに、具体的な予習・復習の内容を伝えることで学生の予習・復習に対する便宜を図りたい。
 より効率のよい授業ができるように、レジュメの作成およびホワイトボードの利用について改善を図りたい。
 理論科目であるから、論文の作成能力を向上させることにも配慮した授業も同時におこないたい。

系： 経営系(実践経営管理論、コーポレート・ガバナンス論、インベストメント論)
 受講者数:107 回答者数:57

質問No.	平均点
1	3.97
2	2.90
3	4.04
4	3.65
5	3.25
6	4.02
7	3.59
8	3.71
9	3.32
10	3.72
11	3.61
12	4.59
13	1.44
14	1.65
15	3.40
16	3.38
17	2.95
18	1.09
19	1.23
20	1.50



受講生の傾向

受講態度は全般にまじめで、熱心な取り組みを見せる学生が多かった。
 出席率、課題提出ともに良好な水準にあったが、後半は遅刻が目立った。
 社会人経験の有無による授業の理解度に対する差が大きい。

講義で工夫したこと・留意したこと

コーポレート・ガバナンスにはいろいろな視点・考え方があり、企業における取り組みも一様ではないので、なるべく偏りのない講義を心がけた。
 授業の効率を高めるため、授業は既存の教科書・参考書を使うのではなく、配布資料にて進めた。
 マネジメント視点からのガバナンスの捉え方についてそれなりのウェイトをかけた。

今後の対応

ガバナンスの議論をより体系的に理解し易い資料作成を心がける。
 より能動的な授業にするために、Q&Aの時間をもう少し増やす。
 事例紹介の場をもう少し増やすとともに、紹介方法を工夫する。

II. F D 活 動

1. Guiral 先生による FD 講習

関西大学が平成 18 年 4 月 7 日から 6 月 5 日の間に招へいした Andres Guiral-Contreras(アンドレス ギラル-コントレラス) 先生 (スペイン、アルカラ大学、経済・経営学部助教授) に依頼し、平成 18 年 4 月 25 日 (火) に学習法講習、そして 5 月 16 日 (火) に教授法講習を開催した。

(1) 学習法講習

日時：平成 18 年 4 月 25 日 (火) 14 時 40 分から 16 時 10 分

場所：第二学舎新ゼミ棟 41 教室

参加者：大学院生・学部学生及び教員合わせて約 100 名。

講習内容

- ① 教材 ギラル教授の論文"The role played by the audit report in credit lending"
- ② 監査報告書が与信意思決定にどのような影響を与えるか、また、監査報告書と会計情報という 2 つの情報を与える順序によって意思決定がどのように影響を与えるかという二点を題材とする論文を教材として、監査の学習にあらたな視点を持たせるように講習がなされた。
- ③ 監査報告書が何ゆえに意思決定情報になるかについての理解が得にくかったのであるが、スペインの監査報告書の実態が丁寧に説明された結果、同国の監査報告書は決算の不備を詳細に指摘し、補足するなど会計情報を多く含んでいることが分かった。外国の制度を良く理解するための学習上の教訓を得た。

(2) 教授法講習

日時：平成 18 年 5 月 16 日 (火) 16 時 20 分から 17 時 50 分

場所：尚文館 (大学院棟) 2 階 遠隔講義室 1

参加者：教員及び大学院生合わせて約 20 名。

講習内容：

- ① 教材 ギラル教授の論文“Six Ethical Positions Enabling a Better Understanding of the Going Concern Evaluation : Improving the Auditor’ s Attestation Function”
- ② 監査報告を行うという行動が監査報告書のもたらす予期しうる影響を織り込んだものだとすれば、継続企業に関する監査人意見を例として、監査人がどういう行動を取りうるかについてのモデルとその結果をまとめた論文を教材として、監査の教授にあらたな視点を持たせるように講習がなされた。
- ③ 監査人の意見表明に影響する経済的、心理的、哲学的、倫理的な 6 つの要因を特定し、どの要因が重要であるかを特定しようとする点で理解が得にくいものもあったが、それは聞き手の文化的背景も影響するので、こうした研究結果を教授するに際しても、文化の相違を説明しながら行う必要があるとの教訓を得た。

2. Mawani 先生による FD 講習

関西大学と甲南大学が平成 18 年 5 月 22 日より 26 日の間に招聘した Amin Mawani 先生（Canada、York 大学、Schulich School of Business 助教授）に依頼し、5 月 23 日と 24 日に教授法を、また 25 日に学習法を講習する会を開催した。

(1) 教授法講習会

教授法講習会は、23 日のケースの活用方法に関するものと、24 日のケースを開発するものから構成された。

日時：平成 18 年 5 月 23 日（火）14 時 40 分～16 時 10 分

テーマ：ケースを実際に活用する教育手法

場所：尚文館 302 講義室

参加者：教員ならびに大学院生

講義内容：

- ① 教材：Mawani 教授による教育用教材“The Case for Cases”（PowerPoint スライド）
- ② 会計の特徴が認識・測定（評価）・開示からなっており、その特徴に基づいて複雑な事業取引を数多くの利害関係者に対して伝達する機能を有しており、その機能を十分に発揮させるためには、財務諸表作成者に一定のスキルや能力、判断などが要求されると解説された。このような一定のスキルや能力等の適格性や、高度の判断を磨く最良の方法がケースを利用することであると紹介された。具体的なケース利用の方法について、スライドを用いて説明を加えられた。

日時：平成 18 年 5 月 24 日（火）16 時 20 分～17 時 50 分

テーマ：ケース教材の開発手法

場所：尚文館 302 講義室

参加者：教員ならびに大学院生

講義内容：

- ① 教材：Mawani 教授による教育用教材“Accounting Practice & Education in Today’s Global Market”（PowerPoint スライド）
- ② 教員側が会計（監査）教育を行なうに当たり、或る会計方針を企業が採用するに当たってのインセンティブ（目的）が何であるか、という点を学生の側に考えさせることが重要であると指摘され、そのためには収益や費用といった基本概念、先入先出法や後入先出法のような会計方針の意義や特徴を教育することは当然であるが、その過程で、財務報告の目的に応じて、どのような会計方針があるのか、その効果はどのようなものか、また当該会計方針を採用するに際しての制約条件は何か、その際に監査が果たす役割は何か、といったことを学生に考えさせる必要があるとされた。具他の事例を挙げながら紹介された。

(2) 学習法講習

日時：平成 18 年 5 月 25 日（木）18 時 00 分～19 時 30 分

テーマ：ケース・スタディの基礎について

場所：尚文館 302 講義室

参加者：教員ならびに大学院生

講義内容：

講義内容：

- ① 教材：Mawani 教授による教育用教材 “Accounting Practice & Education in Today’s Global Market”
(PowerPoint スライド)
- ② 24 日に実施された教授法講習で用いた同じ教材を用いながら、学生に対してなぜ会計を学習し習得しなければならないかを説かれた。その学習に際しての 6 つのレベルとして、初期レベルから知識、理解、適用、分析、統合、評価という段階を説明され、教員の側が教授できるのは第 3 レベルの適用の段階までであり、分析、統合、評価と言った第 4 レベル以降については学生の側がやる必要があり、そのために最も適した方法がケースを用いた学習方法であると結論された。

3. 海外研修

平成 19 年 1 月 31 日（水）から 2 月 4 日（日）までの日程で、シドニー大学ビジネススクール・経済学部（The University of Sydney, Faculty of Economics and Business, Business School）に FD のための視察研修を実施した。視察研修の内容は、以下のとおりである。

1) 教室



教室のタイプは様々であり、国内でも一般的なタイプの教室（写真



1) や、ガラス張りのタイプの教室（写真 2）がある。

前者のタイプの教室には、書画装置が常設されており、教室前部のボードはホワイトボードでスクリーンを兼ねている。よって講義では資料のみを教室に持ち込み、効率よく講義を開始することができる。

また、後者のタイプの教室は、廊下側が一面ガラス張りになっており、どのような講義が実施されているか文字通り「ガラス張り」になっている。そして教室の外側には、どの講義が開催されるか掲示される（写真 3）。教室内の設備は、学生用と教員用の PC が設置されており、本学尚文館パソコン教室に類似している。

（左上・写真 1，右上・写真 2，左・写真 3）

2) 定期試験の開示

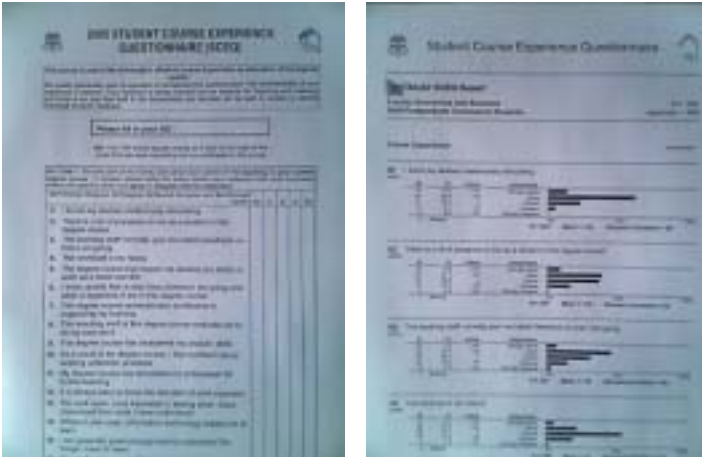
各講義の最終試験等は、図書館の PC から閲覧することができる。図書館からのアクセスのみ可能な図書館のホームページからデータベースのページ（試験のページ）で閲覧することができる。最終試験等は、1997 年（開示が始まったと思われる）から 2005 年までが開示されている（写真 4・5）。開示は前々年の試験までである。フラッシュメモリーなどを利用することで、自習のために自宅等に持ち帰ることも可能である。



（左・写真 4，右・写真 5）

3) 満足度調査

“Student Course Experience Questionnaire”と“Course Experience Questionnaire”と実施しており、前者が在学生に対して、後者は卒業後1年を経過した者に対して行っており、課程に対する満足度調査である。また、“Unit of Study Evaluation”も行っており、科目での学生の満足度調査である。質問状や結果は“[Institute for Teaching and Learning](#)”のサイトから閲覧することができる。



り、前者が在学生に対して、後者は卒業後1年を経過した者に対して行っており、課程に対する満足度調査である。また、“Unit of Study Evaluation”も行っており、科目での学生の満足度調査である。質問状や結果は“[Institute for Teaching and Learning](#)”のサイトから閲覧することができる。

(左写真, サンプル)

4) 責任時間数

本学の責任時間数とは異なるが、教員の担当講義数の目安があるようである。講義の準備や研究・教育に十分な時間を確保するための配慮として、年間4講義(semester)を目安としているようである。

4. CEASを利用した取り組み

(1) 概要

会計大学院では、春学期の基本科目 8 科目につき、その講義内容を撮影し、DVD 化した上で、学生に対して貸し出しを行っていた。この場合、DVD という媒体の制約上からその利便性には一定の限界がある。この状況に対して、工学部冬木正彦教授から、同研究室が取り組んでいる現代 GP「進化する e-Learning の展開～授業と学習の統合的支援および教授法と学習コンテンツの共有化～」の観点から DVD のストリーミング配信試行の協力が得られたので、秋学期の科目から 5 科目に限定して試行実験を行った。なお、ストリーミング配信は冬木研究室が管理運営する CEAS (WEB ベースの教育支援ツール) で行われた。

(2) 効果

本試行に従事した岩井諭、橋元祐貴両君 (工学部システムマネジメント工学科学生) から『CEAS による授業ビデオ配信プロジェクトアンケート結果報告書』(平成 18 年 12 月 15 日) の提供を受けた。同報告書はプロジェクトの一部を構成し、両君の研究成果も含まれているので転載することは避け、本試行にかかる効果のみここに紹介することとした。

① 配信に係る制約条件

コピー不可、再配布不可で履修者のみが視聴可能とすること。また、授業内容を理解する上で、画質や音質に支障なく閲覧できるようにすること。

② 配信対象

会計基準論 (月 2)、監査報告論 (火 2)、公会計理論 (1)、会社法 (木 2)、会計制度論 (金 4) の 5 科目。

③ 効果

上記報告書の中から「総合評価の項目の回答結果のまとめ」を引用する。

「・授業ビデオの画質・画面サイズ、音質の評価は、約半数の人が満足またはやや満足と回答しており総合的に高い。

・授業ビデオの閲覧理由は復習のためと回答した人が非常に多い。

・最も加えてほしい機能は授業ビデオの話題ごとにつけられたチャプターを選択できる機能である。」

上記結果は、DVD 単体の貸し出しに比べて、学生の利便性を増したことを意味する。この冬木研究室の試行結果については (ここに転載しなかった物も含めて) 次年度以降にどのようにいかにについては、本研究科教務・FD 委員会が早期に結論をまとめる予定である。

Ⅲ. 今後の課題

Ⅲ. 今後の課題

平成 18 年度は本研究科にとって初年度であり、当初の想定と現実との相違を認識し微調整を加える年度であった。調整を加えきれなかった部分もあり、今後の課題として技術的なものから基本的なものまで様々な課題が挙げられる。今後の課題を整理すると、講義の実施に直接関わる課題と講義実施に間接的に関わる課題に分けられるであろう。そして、教員スタッフの基本的な考え方に関わる課題がそれに加えられると思われる。以下、この整理にもとづいて今後の課題を挙げる。

(1) 講義関係

講義の運営について、講義そのものの実施方法や受講前後の学習指導・支援に関してまとめる。また、講義と関係して答案練習会やオフィス・アワーについても記載する。授業評価アンケートの結果と分析で、今後の課題として各科目・系ごとにすでに示されているが、再度ここに列挙する。

講義そのものの実施方法

・講義の運営に関して

授業の進度を少し速めて緊張感を与える

講義形式で単調になりやすいため、メリハリをつけるよう工夫する

講義形式であるが、ときどきディスカッションも加えるようにする

授業時間中の受講生側の理解度を確認するために、適時に指名して答えさせる必要がある。

このことは、授業時間中の緊張感を保つことにも資すると考えられる

より能動的な授業にするために、Q&Aの時間をもう少し増やす

講義の範囲が広く、問題演習に十分な時間がとれないので、講義の時間配分を考える

改変極まりない会計基準・制度ではあっても、現代社会のもとで依然として有効に機能している従来の基礎的部分については言及し、その重要性を認識させるように努める

・配付資料等に関して

レジュメをもう少し簡素化する

より効率のよい授業ができるように、レジュメの作成およびホワイトボードの利用について改善を図りたい

受講前後の学習指導・支援

・受講生の学習（予習・復習）時間に関して

学生に予習・復習が効果的になるように、レジュメ配布のタイミングを見直す。

予習の時間が短いことから、事前課題などにより対応することが必要であると考え。

学生が予習しやすいよう、当該授業の終了時に次回の授業内容を簡単に予告する。

こちらの期待に反して、受講生の側での予習・復習の時間が相対的に少ないため、復習課題の一部提出強制をする必要があるかもしれない。

講義内容の定着を図るための課題提出を実践する。

学生に予習・復習を促すとともに、具体的な予習・復習の内容を伝えることで学生の予習・復習に対する便宜を図りたい。

・受講生の知識レベルの差に関して

学生一人ひとりの理解度に差があるので、それに応じた効果的な問題作成を心がける
知識レベルに差がある受講者を対象とした資料作成を心がける
学生のレベルに差があるので、それぞれの学生に応じた授業ができるように配慮したい

答案練習会

答案練習との連動が必要であるため、その一部を授業で取り込む必要があると考える
答案練習会との連動を図る必要がある

講義そのものの実施方法について、ディスカッション、質疑応答、教員からの質問、問題演習等の時間配分などが挙げられている。いずれも受講生の緊張感を促し、講義内容の理解を深めることが目的となる。また、後述する受講生の知識レベルの差について対処できるような実施方法を検討する必要がある。

受講前後の学習指導・支援について、「I. 授業評価アンケート（春学期分）結果概要」「3. 全体像」にもあるように、受講生の知識レベルに差があることや予習・復習等の学習時間について課題が残っている。受講生の知識レベルの差に応じた講義運営を行う必要がある。特に課題や練習問題等の作成にあたり、多段階の練習問題や解説の作成が必要である。また、受講生の予習・復習等の学習時間の少なさについて、その理由を調査する必要がある。そして理由内容に応じた、講義の実施方法や受講前後の学習指導・支援の対応を講じる必要がある。さらには、オフィス・アワー、個別演習科目であるアカデミック・ソリューションやプロフェッショナル・ソリューション、答案練習会などを通じて、対応した成果を学生に浸透させる必要がある。

本研究科では、学習支援としてオフィス・アワーや答案練習会を設けている。また、基本科目群については全科目全講義を録画した DVD の貸し出し、その他科目については支障のない範囲でのストリーミング配信を行っている。しかし、これらの学習支援制度が十分に活用されているとはいえない。今後は講義と学習支援制度との有機的な連携を強め、総合的に学生の学力を高める方策を講じる必要がある。

受講生の知識レベルの差をできるだけ解消するため、平成 19 年度入学予定の学生に対して事前指導を行っている。この成果については、平成 19 年度の授業評価アンケートの結果と分析が待たれるところである。

講義内容について、科目によってその範囲の広さにアンバランスが生じている。「基本科目群に求められる要件は、公認会計士試験の短答式レベルを最低限クリアできることにあり、講義内容の調整を図る必要がある」との意見のように、科目間の調整や開講学期などの調整が必要である。また、長期的には、科目配置や配当年次の見直し、科目の統廃合等によって調整する必要がある。

(2) 講習会・研修関係

平成 18 年度は、Mawani 先生による FD 講習会、Guiral-Contreras 先生による FD 講習会が行われた。また、シドニー大学への FD の視察研修が実施された。詳細は「II. FD 活動」にまとめた。

今後の課題として、実務家教員による研究者教員に対する実務研修、研究者教員による最新理論に関する研究会、事例研修会の開催および積極的な参加が必要である。また、それらを促進するような方策を講じる必要がある。

(3) 教員スタッフ関係

本研究科は、「超会計人」と呼んでいる競争優位を持った公認会計士の養成を第一目的とし、世界に通用するような職業会計人を養成することを目的としている。よって、学生のほとんどが公認会計士試験の受験を希望している。公認会計士試験の受験と早期合格を希望する学生からは、試験を意識した講義や対策への要求が生じやすい。本研究科は専門職大学院として「テクニシャンよりもプロフェッション」の養成を目指していることもあり、このような要望に必ずしも応えきれものではない。しかし、一方で、専門職「大学院」であることを盾に、本来の学生の要望を見落とす危険を創出しているのも事実であろう。

教員の講義における工夫や心がけが、受講生の理解の向上につながっているのか、あるいはつながるのかを確認する工夫が必要である。講義の実施方法や学習支援体制などの改善だけでなく、教員スタッフが独善的にならないよう、学生への教育に対する真摯な態度や心構えを維持するよう心がける必要がある。

IV. 授業評価アンケートフォーム

「会計大学院学生による授業評価」アンケート

- I. 授業の評価
- II. 授業への取組み
- III. 答案練習会について

I. 授業の評価

- 1) 授業内容は、講義要綱、授業計画に示したものに沿った内容でしたか。
 5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない

- 2) この授業の進捗はどうでしたか。
 5. かなり早い
 4. 早い
 3. ちょうどよい
 2. 遅い
 1. かなり遅い

- 3) この授業は教員によってよく準備されていきましたか。
 5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない

- 4) 学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか。
 5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない

- 5) この授業での教員の話し方や声の大きさ、説明の仕方は適切でしたか。
 5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない

- 6) 教科書・配布資料の利用は適切でしたか。
 5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない

- 7) ホワイト・ボードや OHP、パソコン等の機材の使い方は適切でしたか。
 5. 強くそう思う

4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない
- 8) 教員は、学生からの質問に的確に対応しましたか。
5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない
- 9) 宿題および小テストの内容・回数は、講義内容を理解する上で効果的でしたか。
5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない
- 10) この授業のクラスの規模・クラス分けは適切でしたか。
5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない
- 11) 全体としてこの授業を受講して満足しましたか。
5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない
- ## II. 授業への取組み
- 12) この授業への出席状況はどうでしたか。
5. 90%以上
 4. 70%以上
 3. 50%以上
 2. 30%以上
 1. 30%未満
- 13) この授業についての予習を、毎回どれくらいしましたか。
5. 2時間以上
 4. 1時間30分程度
 3. 1時間程度
 2. 30分程度
 1. 0時間
- 14) この授業についての復習を、毎回どれくらいしましたか。
5. 2時間以上
 4. 1時間30分程度
 3. 1時間程度

2. 30分程度
 1. 0時間
- 15) この授業に触発されてさらに深く学習したいと思いましたが。
5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない
- 16) この授業を通じて、職業会計人に必要な知識が深まった、能力が高まったと感じましたか。
5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない
- 17) あなたは全体としてこの授業を受講して理解できましたか。
5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない
- ### Ⅲ. 答案練習会について
- 18) あなたはこの授業に対応した答案練習会にどれくらい参加しましたか。
5. 全部
 4. 半分以上
 3. 半分未満
 2. 参加はしていないが、問題・解答用紙を受け取った
 1. 参加したことがない
- 19) この授業はこの授業に対応した答案練習会に役立ちましたか。
(答案練習会に参加したことのある学生のみ回答してください)
5. 強くそう思う
 4. そう思う
 3. どちらともいえない
 2. そう思わない
 1. 全くそう思わない
- 20) あなたはこの授業に対応した答案練習会に参加するに当たり、十分な取り組みをしましたか。(参加していない場合は、選択肢2ないし1の何れかを選択してください)
5. 十分であった
 4. やや不十分であった
 3. 不十分であった
 2. 現在は参加していないが、将来は参加するつもりである
 1. 答案練習会には参加しない

——以上——

ご協力ありがとうございました。

関西大学大学院会計研究科（会計専門職大学院）

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

電話 (06)6368-1121 (代表)

Fax (06)6368-0610